

わからないということ

坂田三允（群馬県立精神医療センター看護部長）

1968年、日本のあちこちで「大学紛争」が激しくなり始めた頃、1枚のポスターがちょっとした話題になった。歌舞伎の役者絵に「とめてくれるなおっかさん、背中のおちょうが泣いている、男東大どこへ行く」（正確ではないかもしれない）というコピー。東京大学駒場祭のポスターである。

当時、私は紛争とは程遠い生活をしていた学生であったが、このコピーには、漠然とした不安感あるいは拠り所のなさともいえるのだろうか、何か心を騒がせられてしまったのだ。

このポスターを描いたのが東京大学文学部国文科に在学中であった橋本治。本書の著者である。その後彼は1977年にあの『桃尻娘』で小説家としてデビューし、講談社小説現代新人賞の佳作賞を受賞する。『「わからない」という方法』で自分自身について「やたらといろんなことをやってるでしょ？あまりにもいろんなことをやりすぎて、正体不明みたいなんですよ？」と述べているように、『桃尻娘』以降の活躍はすさまじく、小説、評論、戯曲、古典の現代語訳、エッセイの他になんと、男にセーターの編み方を教える本まで書いてしまうかなり「ヘン」な人であった。

最近にはあまりにも次々に出版される著書を読みまきることができなくなって遠ざかっていたが、かつて私は、「ミッキー・ロークの顔を編みこんだセーターを編んでほしい」と読者カードに書いて送る程の彼のミーハーなファンで、彼の著書を片っ端から読んでいた。私がそんな

風にせっせと読んでいたのは、不思議なことに、元気のないうちに彼の本を読むとちょっと元気になれるからでもあった。今回久しぶりに読んでみたいと思ったのは、多少元気がなくなりかけていたからかもしれない。

そして、本書を読んで、私はなぜこの著者の本を読むと元気になれるのかがちょっとだけわかったのだ。著者は言う。「脳は自分で自分のことを判断してしまう。しかし、脳の命令に従う身体各部に、その判断能力はない——『ない』と、脳味噌は断定してしまう」しかし「脳の率いる『自分』という部署を構成するのは、身体という部下達なのである。『わかる』は、その部下達が、自分の仕事を自分なりに自覚し、働き始めることである」と。

この著者の本は全般的にくどいのだが、そのくどさのおかげで、私の中でなんらかの「わかる」が生じているらしいのだ。つまり、自分の中でなんとなくもやもやしていたものが整理されてくどくどと説明される間に、私の身体そのものが反応して納得させられてしまうのである。納得はもやもやの解消であり、元気も出るというものだ。

私は仕事が遅い。それは多分、私の脳はいわれたことをわかっているつもりでいても、身体が自分の仕事を自分なりに自覚するのに時間がかかるからなのだ。「大女、総身に知恵がまわりかね」ということか。そんなことを私は思った。しかし、こんな風にこの著者にこだわっている私も、相当に「ヘン」な人だと自慢してもいいのかな？ ▲



さかた・みよし

この4月から群馬県立精神医療センターにて看護部長の任を仰せつかることに。通勤に時間がかかるようになって、電車を書斎がわりに本をたくさん読もうと思っていたのに、つつい、ZZZZ・・・。寝室がわりになってしまっている。大きな計算違いだったわー。

●群馬県立精神医療センター：〒379-2221 群馬県佐波郡東村大字国定 2374